

定年退職まで後1年を迎えて思い出を振り返る

「野球と私」

原田康明*

はじめに、2002年3月に定年退職を迎えることになりました。約55年間、野球に生きてきた人生であります。受験も就職もすべて野球と一緒に道を開いてくれました。55年間、長いが振り返ってみれば又短いものでもありました。ここに私の55年間の野球との人生を思い出としてみたいと思います。

1. 野球との出会い

昭和20年終戦(大東亜戦争、第二次世界大戦)、10月体操の時間(当時は体育ではなく体操と呼んでいました)に森島先生のもとでソフトボールなるものを初めて知りました。また偶然にも私は身体が頑丈なので捕手を命じられ試合開始、当時のボールは皮で手縫いの柔らかいものでした。グローブは勿論ありません、素手取りです。その時の思い出はファウルチップを何回も巧く捕球した記憶しか残っておりません。それと交代時のチェンジという言葉も知りました。

11月頃野球部設立のため、希望者多数のため野球の試験がありました。キャッチボールのみでした。私はこの試験に合格することはできませんでした。不合格です。理由はキャッチボール開始と同時に相手方の暴投により球が林の中に入り、探しているうちに試験終了ということでした。残念でした。合格者はすべて高校で野球をやめ、落ちた私が1人大学、職業野球と歩くことになり人生わからないものです。何故野球部に入ることができたかと言うと、球技大会において強打連発、強肩を認められ、晴れて野球部に入部することができて感激で胸が一杯でした。この純真さは何処に消えたのでしょうか。守備位置は外野、内野、1塁手(捕球は非常に

巧くワンバウンド処理が得意だった。)捕手が上級生であったが、弱肩のため、強肩の私が捕手になることになり、ついに生涯の守備位置が決定したのであります。

高校時代は特に指導者はなく四商OBリーグ(愛知商業、中京商業、亨栄商業、東邦商業)を鳴海球場に観戦、わずかな知識を得たものです。私が大学で野球をやりたい、又職業野球に入りたいと考えたのは、当時、東京から早稲田OBの谷口さんら数人で愛知県の高校野球に指導に来られた折、私が認められ新聞紙上に載り、勇気が湧き野球をやろうと決意をしました。

昭和25年、夢がかなえられ東京の大学に入学、夢と希望に満ち上京はしましたが、近視が進み、又食料事情も悪く、精神的な弱さも重なり挫折中退、名古屋に戻る羽目になりました。野球を忘れることもできず、わずかな知識を持ちながら、母校の練習に参加していたが、翌年、愛知大学に2年編入学ということもできたが、1年から再入学、メガネを使用しつつ(守備の時メガネなし)練習に取り組みました。

愛知六大学では、当時名古屋大学が断然強く歯が立たず、1年生の時優勝することはできず、2年生になり、強敵名古屋大学を破り初優勝、第1回全国大学野球選手権に出場、対戦相手は関学(関西学院大学)1回戦で敗退、しかし、心は晴れ晴れとしたものでした。第2回大会には出れず、第3回大会(4年の時)出場、明治大学と対戦(秋山、土井のバッテリー)敗れはしましたが、私は4打数2安打、秋山投手より左前安打(フォークボールを打つ)胸が踊ったものです。

当時ドラフト制度がなく、厳しい制限なく夢

* 愛知大学法学部教授

にまでみた職業野球に入団することができました。昭和30年、キャンプ、オープン戦、初のオープン戦は中日球場（現在の名古屋球場）で中日との試合で代打出場四球という結果でした。29年、中日優勝の翌年、西沢、児玉、杉下の全盛時でした。私は残念なことに30年8月15日、悪性痔の疾患のため入院手術、これで野球生命も終わりを告げたようなものでした。2年の療養の後完治。

32年12月12日、高校時代の友人の紹介により中央相互銀行（現愛知銀行）に入行、2年2ヶ月間の銀行生活を経て、35年3月、愛知大学硬式野球部監督として就職をすることになりました。理由は大学の監督は小山さんがやっていますが、国鉄スワローズの監督として砂押さんが日本鉱業日立より赴任されたので、後任に小山監督が日立に推挙されたためであります。

大学野球の監督、大きな夢を持ち、指導しましたが私の無力のため、また滝監督の引きいる中京大が常勝、優勝なんて夢の又夢、挫折も何度か、何とか一度は勝ちたいと願いつつも勝てず、やっと8年目に夢が現実のものとなり、昭和45年秋のシーズン阪口主将（現東邦高校監督）と共に嵐投手の好投により私の監督としての初優勝が出来ました。今でも目を閉じれば、最後のレフトフライ（レフト本田君）胸が踊った瞬間でありました。自然に涙が出てきて止まりませんでした。その後もこの感激を胸に秘め頑張ってきました。ありがとうございます。当時の部員にもう一度お礼を言いたい。翌46年春、連続優勝、運良く最初の大学野球選手権が地方で開催された時で、名古屋（中日球場）で、大学、又地元OB応援を受けて出場、幸運でした。戦歴は、2回戦は千葉商科大学に河村投手の好投により完封勝ち、3回戦、慶応大に惜敗、この敗戦は私の投手継投でありました。軟投脇田投手を3回までと前日まで決めていたものを4回まで引っ張り失点、私の監督時代、最大の失敗であったと自戒の念に苦しんでいます。その後は学校の方針が変わり選手もとれず2部へと転落、こ

こで野球人としての苦しい悲しい経験を身にしみて体験をしましたが、今の私の心の糧です。苦労した甲斐はありました。その後、酒井主将、奥田投手時代1部に復帰、この勝利は最初の優勝より私にとっては価値のある一つでした。この時には涙はありません。やっと1部に返り咲くことができたという安心感だけでした。ここまですが私の野球人生であったと言えます。その後についてはあまり書きたくありません。

数ある思い出の中で書いてみます。

①メガネの捕手

現在ヤクルトスワローズの古田捕手が有名ですが、私の記憶では国鉄スワローズ時代の辻井選手が最初で、この選手は守備ではメガネをはずし、打席の時メガネを着用していたように思います。私が昭和30年、その後、巨人、大洋の大橋選手が着用、結局、守備でメガネを着用したメガネの捕手は私が一番最初ではないかと思っています。

②富士山

昭和25年、東京より名古屋に帰る夜行列車で月夜（満月に近い）に雪をかぶり月に照らされた何とも表現しがたい富士山、それから私は富士山のファンになりました。

③省線電車

昭和25年朝混雑、現在の比ではありません。車輛の中にある支柱が曲がってしまう程の満員電車で、窓といえば殆ど木張り、ガラスの部分が横（幅）20程ぐらい、縦40程ぐらいで外を見ることも出来ません。お上りさんの私には、下車駅は4つ目駅と計算するか、又は扉のそばにへばりついているかのどちらかでありました。経験ほど楽しいものはありません。本での知識より実際に経験することです。

最後に一流のプロ野球選手になることはできず、また、大学野球の監督として夢にみた全国制覇は達成できませんでしたが、私の才能にしては最高の野球人生であり、「我が人生に悔いはなし」であります。